

# ぐらぐらつくしま

福島県情報誌 第27号

GRAPH UTSUKUSHIMA 2005

冬号

季刊誌

特集

## 至幸のハーモニー

合唱王国ふくしまの素顔

大好きうつくしま PERSON INTERVIEW

作家 松村栄子さん

# 光が溢れる風景

## ふくしまの冬

霧氷をまとうて輝く樹木。

モノトーンの世界を、

幻想的に変える

光と雪の造形美。

この美しい国の透明な冬には、

自然と光が織りなす

風景がよく似合う。



猪苗代町 / 雪原(大倉川)



北塩原村 / 樹氷(西吾妻山)

### CONTENTS

光が溢れる風景 1

ふくしまの冬

特集 至幸のハーモニー 3

県立橋高等学校合唱団 6

二本松市立二本松第一中学校合唱部 6

会津坂下町立第一中学校合唱部 7

県立安積黎明高校合唱団 8

データで見る合唱王国ふくしま 9

双葉郡コーラス交歓会 10

合唱王国の系譜 11

大塚好子 INTERVIEW 松村 栄子さん 13

ふくしまの匠 大堀相馬 14

うつくしまフォトニュース 15

うつくしま四季散歩 草野心平、玄玄天 17

18

目次のページに掲載する写真を募集します。奮ってご応募ください。

#### 募集内容

テーマ / 「薫りのある風景 - ふくしまの春」

(次号春号に掲載)

サイズと種類 / カラープリントはサービスサイズ以上四つ切まで。デジタルフォトの場合はハガキサイズからA4サイズまでの大きさでプリントしてください。画像処理をした場合は必ずその旨を明記してください。

応募方法 / 作品には 氏名 郵便番号 住所 電話番号 撮影場所 作品に関するコメント(150字程度) フィルム名・デジタル処理の状況を記入し、郵送または持参してください。

締切

2月10日(木)必着

#### 応募・問い合わせ先

〒960-8670(住所記載不要)

福島県県政広報グループ「グラフうつくしま 春号 目次写真応募」係

TEL024-521-7014 ホームページ <http://www.pref.fukushima.jp/kouhou/>

#### その他

応募された作品は原則として返却しません。

採用の場合、5千円相当の図書券を贈呈します。撮影場所と撮影者のお名前と居住市町村名を併せて掲載します。

一人で複数の作品を応募しても構いません(ただし採用は一人一作。)

作品は福島県内の風景を撮影したものとし、未発表のものに限ります。

採用された場合は、別途ネガまたはボジ、オリジナルデータをお送りいただきます。返却をご希望の方は、郵便番号・住所・氏名を記入した返却用封筒(切手貼付のこと)を同封してください。作品の著作権は福島県に帰属します。

#### 表紙PHOTO Johnny Hymas

写真家ジョニー・ハイマス

プロフィール / 1934年、英国生まれ。69年初来日。日本の美しさに強く魅せられ、以来日本の自然、農村風景、伝統文化を撮り続け、数々の写真集を出版。岩手県立大学農学文化賞受賞。「JA福島たんぼのフォトコンテスト」審査委員長。「筑紫哲也NEWS23」、「微子の部屋」、「クローズアップ現代」などテレビ出演多数。展覧会や講演会、そして様々なメディアを通じ日本の自然と文化の大切さを発信している。

[www.johnny-hymas.net/](http://www.johnny-hymas.net/)



表紙の写真 「田島町・雪景」

# 至幸の 八ーモ二ー

合唱王国ふくしまの素顔



平成十六年十月三十日、三十一日、東京都府中市。府中の森芸術劇場どりーむホール」の二千余の客席を包む静寂には、居並ぶ者達の期待と不安、緊張が入り混じり、熱気が漂っていた。

ここは、第五十七回全日本合唱コンクール全国大会の中学校・高等学校部門の会場。高等学校部門に三十四、中学校部門には三十九の合唱団が全国各地から集まり、それぞれ見事な八ーモ二ーを響かせた。会場を埋める合唱団員達は、今から発表される審査結果をじっと待っている。

結果が読み上げられるたびに沸き起こる悲鳴のような歓声や拍手。緊張から解き放たれ、笑顔が弾ける。達成感に涙を流す者もいる。中でも最も多くの拍手と歓喜の声に包まれたのは福島県勢だった。高等学校部門に出場した二校はともに金賞。中学校部門に出場した六校の合唱団の成績は、金賞五、銀賞一。また、およそ一カ月後の十一月二十日に愛媛県県民文化会館で開催された大・学・職場一般部門における出場三団体の結果は、金賞二、銀賞一。そして三部門で、金賞の中でも特

に優れた合唱団に贈られる、文部科学大臣奨励賞を受賞した。

「合唱王国」とは福島県の持つ二つの顔である。今やすっかり定着した感があるこの言葉。しかし、「王国」の素顔とはどんなものなのだろうか。本県の合唱がこれほどまでに活躍できるのは何故なのか。その源流はどこにあるのか。それらを探る中で浮かび上がってきたのは、一つの合唱団に偏らない地域的・年代的な裾野の広がり、それを支える指導者、王国の礎石を積み上げた人々の姿である。



写真：二本松市立二本松第一中学校合唱部



澄んだハーモニーを織りなす橘高校の生徒達



会場となった府中の森芸術劇場(東京都府中市)

特集 至幸のハーモニー 合唱王国ふくしまの素顔

金賞の発表に喜びが爆発 会津坂下町立第一中学校の生徒達



熱心にメモをとる安積黎明高校の生徒達

合唱王国の裾野を巡ろうと、全日本合唱コンクールに  
出場する四つの合唱団を訪ねた。以下はその際目に  
したそれぞれに個性的な合唱団の姿の一端である。

### 県立橘高等学校合唱団 馥郁たる美声

「我々は『品のいい合唱団』なんだから、もっと優しいまなざしで歌わないと駄目だよ。」

「冗談とも本気ともつかない先生の言葉に、部員の間から笑い声が漏れる。県立橘高校合唱部の練習中のひとコマだ。福島市にある橘高校はもとの福島女子高校で、三年前に共学となり校名が橘に変わった。丸屋根風の天井を持つ音楽室いっぱいには部員達がずらりと並び、顧問は、菅野正美教諭。

練習が始まる前に、何人かの生徒達がおもむろに足もとに置いてある霧吹きを手にとって空気を湿らせる。練習の合間にも使用する。喉を痛めないようにという配慮である。

歌うのは課題曲「コノモスをあげよう」である。出だしから細かく指示が出る。「いらっしやいの最後の『い』がべたつとしていね。意志をもって上に引っ張る感じで歌ってください。」

「あきのなかをが、はきのなかをを聞こえるので気を付けて。」

「かけていらっしやいの部分は、喋る時に自分が使つてあろう空気、筋肉の



流れを歌う時でも意識して。」

練習では、問題点がクリアされるまで何度でも歌い直し、それから次に進むという極めてデリケートな作業が続く。しかし厳しいという感じではない。時折先生がユーモアを交えて部員たちを笑わせ、非常に和やかな雰囲気だ。勿論、部員は冗談にばかり反応しているわけではなく、指摘があればすぐさまメモを取る。その表情は真剣そのものだった。

全国大会当日。八十人の部員達は、課題曲に加え、通りすぎる台風を表現した与謝野晶子の詩『颱風』を、透明感の中にもしやかな強靭さを秘めたハーモニーで表現しきった。

### ”二本松市立二本松第一中学校合唱部 倍音を聴きたい”

軽快なリズムにあわせて体が揺れる。風が吹かれた野の花が波打つように。k i u r u n t i e e。フィンランド語で、ひばりの道という意味だ。イメージされる情景は、北国の遅い春を待ちわびていた鳥達の姿であるうか。軽やかで時に鋭い響りが耳に心地よい。

顧問の古閑幸子教諭の指揮に合わせ、て歌うのは、二本松市立二本松第一中学校合唱部四十一人の女子生徒達。伴奏はない。

学校の音楽室では、男子も含めた五十人ほどの生徒達が迎えてくれた。二本松一中には常設の合唱部のほかに特設の合唱部もある。男子生徒がいるのは特設部だ。



全日本合唱コンクールには女子だけで、つまり同声合唱部門での出場だが、前週には混声合唱団として別のコンクールに参加することになっており、その際に歌う曲を披露してくれた。男声が混じると多少荒削りではあるが、勇ましさ、迫力がある。何より元気いっぱいである。楽しんで歌っている男子生徒らが室内に活気をもたらし、見ていて微笑ましい。

引き続き、女子生徒だけの合唱を聞く。洗練され整った声音という印象である。

古閑教諭は、時に首をかしげたり指揮を中断して指示を与えることもあったが、基本的には一曲を通して歌わせた。部員達のみこみが早く、何度も同じところで躓くということはないようだ。



会津坂下町立第一中学校の古川教諭

生徒は目を白黒させていた。結果発表の時も、「ゴールド、金賞」の声に「うーっ！」「やったあ！」とまるで地鳴りのようにまさに体育会系だ。  
「部員を集めるのが大変で。大会が近くと運動部の顧問の先生にお願いして放課後も練習時間をもらうようにしますが、普段は朝練が中心です。今日の全体練習は六時十五分から半までです。」  
そうした制約の中で、二年連続の全国大会での金賞受賞である。  
「時間が限られている分、集中して取り組んでいるのがかえっていいのかもしれない。また経験が少ない分、怖い物知らず。幸せばかりを感じて歌っているように思います。」  
古川教諭の言葉どおり、府中で再び耳にした歌声は、音楽室で聞いた時と変わらず生き生きと躍動感に溢れるものだった。



「威風堂々」コンクール壇上に立つ安積黎明高校の生徒



「元気いっぱい」会津坂下町立第一中学校



特集 至幸のハーマニー 合唱王国ふくしまの素顔

## 県立安積黎明高校合唱団 精緻にして秀麗なる表現力

「プログラム五番、東北支部代表、福島県立安積黎明高等学校合唱団」アナウンスに対する拍手が他の団体の時よりも大きく聞こえる。この合唱団に対する聴衆の期待のあらわれであろう。同校は、前身の安積女子高校時代を含めて実に二十四年続けて金賞を受賞している。

指揮者の星英一教諭の手が動き出す。まずは課題曲「コスモスをあげよう」。続く自由曲「火の王よ あなたの国の」は時として八つ以上ものパートに分かれ、歌声が次々とたたみかけるように押し寄せる。高い歌唱力が求められる曲だが、部員達は無伴奏の出だしからびったりと声を重ね、透徹した響きで歌い切った。ところで、この自由曲は、オリジナル曲だ。学校の委嘱を受けた作曲家・鈴木輝昭氏が、合唱団の声質など、その特徴を踏まえ、もっとも相応しい詩を選んで音を付すのだそうだ。前出の橋高校の自由曲もこうしたオリジナル曲である。ちなみに、今年黎明の部員達の手元に自由曲の楽譜が届いたのは何と県大会の前日。つまりたった一日の急ぎしらせて県大会に臨んだのだという。  
「火の王よ あなたの国の」は、見学

「東北大会では満足のいく歌い方ができなかった。生徒達は納得していません。もう一度チャンスが欲しい、と泣いて訴えるのです。私達は全国大会というチャンスを与えられたと思っています。」古川教諭は言う。  
古川教諭によれば、いいハーマニーが生まれると、自分たちの声だけでは足りない響きが鳴り出すのだとか。これを「倍音」と呼び、この倍音を一つの

目標に練習に取り組んでいるという。昨日の練習では倍音が出たと言ってとても喜んでいました。  
「よい合唱とは自分達の思いを伝える歌。そういうものでありたいと願っています。歌ついで、皆が気持ちを一つに重ね合わせることが出来ます。私達は、こつとした表現活動として合唱に意欲的に取り組んでいます。」こう話す古川教諭の目はきらきらと輝いていた。

## 会津坂下町立第一中学校合唱部 気合と集中力でハーマニーを 紡ぐ”寄り合い”合唱団

会津坂下町は、会津若松市の北西に位置する人口一万九千人ほどの町で、第一中学校は町の中央やや東よりにある。練習の様子を見たいと学校を訪れたのは、全国大会を約二週間後に控えた日の夕方のことだった。本番に向け、さぞ熱のこもった練習をしているのだろうと想像していた。

ところが、聞こえてくるのは井上陽水の「少年時代」や松田聖子の「瑠璃色の地球」といったポップスばかり。

顧問の古川真弓教諭曰く、今度の土曜日の文化祭で歌う曲の練習です。「この中学校では音楽活動が盛んで、文化祭では合唱の他にもミュージカルを上演するといふ。」  
練習風景を見せてもらおう。音楽室では、ピアノを囲んで十五人ほどの女子生徒

「うちの合唱部は特設部で、部員はみな運動部とのかけもち。だから体育会系というか、声が元気で活発な生徒が多いように思います。」と古川教諭は笑う。  
全国大会当日の生徒達も元気いっぱいだった。夕闇迫る府中の森公園で出番前の部員達に会った。目をつむり手をつなぎ、スクラムを組む。「気合いを入れていくぞー！」「セイヤー、オリヤー」足を踏みならし、氣勢を上げ、最後は笑顔で終わりますよー！とリーダーが締めくくる。およそ合唱団には似つかわしくない光景に、周りにいた他校の



時に取り組んでいた曲だ。



妥協の余地は微塵もない。部員達の姿には「一心不乱」という表現がぴったりだ。凄味さえある。窓の外では台風がもたらす激しい雨が唸っているのだが、気迫みなぎる音楽室には全く聞こえてこない。



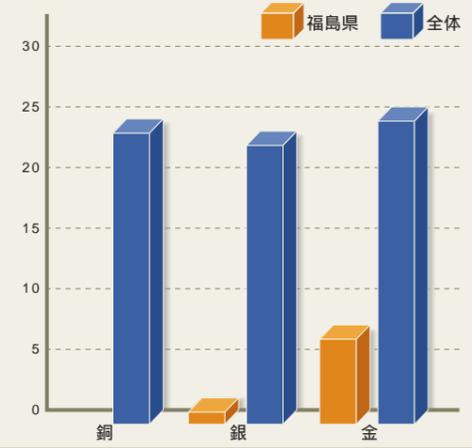
音楽室に入った時には面喰らった。部員達は三、四人一組に分かれて口々に何か言い合っている。八十人近い部員が、その内容は皆自分から聞かない。ただの音としてしか聞こえない。入口近くの音に近づいてみる。「ひょうげんするでしようの“う”と“げ”のつながりが悪いので気をつけて。」フレーズの終わりが間延びして聞こえるので軽く置いてあげる感じで。「お互いの声や響きを聞き、気づいたことをアドバイスし合っているのだ。」  
黎明の練習は非常にストイックだ。一フレーズはおろか一単語にまでこだわって、僅かのぶれも修正しながら進む。

金賞と文部科学大臣奨励賞を受賞し喜びに沸く部員達の姿を見ていて、音楽室の壁に掲げてあった言葉を思い出した。「可能性を追求しよう！」「可能性に挑戦しよう！」「この言葉どおり、彼女は合唱表現の可能性を極致まで追い求め、府中の舞台上で存分に発揮したのではないだろうか。」

# データでみる合唱王国ふくしま

「合唱におけるコンクールの各賞は、ひとつの目安で金賞受賞が目的ではない」と各校の指導者は異口同音に語るが、それでも結果が気になるのもまた人情。合唱王国ふくしまの実力を今回の全日本合唱コンクール（中学校・高校部門）の結果を基に検証したい。

全出場校七十二校のうち福島県は八校で、二位の島根県五校を大きく引き離し都道府県別第一位。全体の一分強を占める。金賞・銀賞・銅賞の分布は、それぞれ二十五校、二十三校、二十四校とほぼ同比率であるが、福島県は金賞七校、銀賞一校と、金賞受賞校の三割弱を本県が占め、更に中・高ともに最高賞である文部科学大臣奨励賞を受賞するという驚異的な結果を残した。



福島県の層の厚さを物語るデータがもう一つある。八月に行われた福島県合唱コンクールでは、今回高校の部で文部科学大臣奨励賞を受賞した安積黎明高校は三位にとどまり、一位の橋高校との間に、東北大会で金賞を受賞したものの全日本出場はならなかった福島高校混声合唱が割って入った。また、同じく東北大会で金賞を受賞し僅差で全日本出場を逃した葵高校も高いレベルを持った合唱団である。中学の部でも今回金賞を受賞した二本松一中央（五位）、会津若松二中（五位・同点）より上位に会津若松三中（四位）が支持された。

今回の全日本合唱コンクールでの本県勢の圧倒的パフォーマンスは、合唱王国ふくしまの「群としての底力」の現出とも言えよう。

## 第五十七回 全日本合唱コンクール 全国大会概要

高等学校部門と中学校部門、大学部門・職場部門・一般部門からなる。高等学校部門および中学校部門は東京都府中市で、大学部門・職場部門・一般部門は愛媛県松山市で開催された。

出場する合唱団は、府県大会各支部東北関東など大会を経て選出される。

### 演奏曲

高等学校部門と大学部門・職場部門・一般部門は、混声・男声・女声別に用意された課題曲の中から一曲と、自由曲を演奏。中学校部門には課題曲はなく、自由曲のみ演奏。

### 賞の種類

金賞・銀賞・銅賞の三つ。金賞受賞団体の中から特別賞として、文部科学大臣奨励賞などが贈られる。合唱指揮者や作曲家、声楽家などが審査員となり、各部門ごとに審査を行う。

### 大会結果(出演順)

高等学校部門  
Bグループ：三十三人以上)



- 県立安積黎明高校 金賞、文部科学大臣奨励賞
- 県立橋高校 金賞
- 中学校部門
- 【混声合唱の部】
- 福島市立福島第一中学校 銀賞
- 郡山市立郡山第二中学校 金賞、文部科学大臣奨励賞
- 須賀川市立第一中学校 金賞、府中市教育委員会賞
- 【同声合唱の部】
- 会津若松市立第二中学校 金賞、府中市教育委員会賞
- 二本松市立一本松第一中学校 金賞
- 会津坂下町立第一中学校 金賞
- 大学部門・職場部門・一般部門
- 【一般A(三十二人以下)】
- 会津混声合唱団 金賞、文部科学大臣奨励賞
- 【大学B(三十三人以上)】
- 福島大学混声合唱団 銀賞
- 【職場部門】
- 県庁混声合唱団「きびたき」 金賞、日本放送協会賞

# 双葉郡コーラス交歓会 歌を楽しむ。



## 和やかな雰囲気の中で

十月三十一日、全日本合唱コンクールと同じ日、富岡町文化交流センターでは双葉郡コーラス交歓会が開催された。開催地の富岡コーラスほか双葉郡の合唱愛好サークル六団体の演奏が行われた。

交歓会は、コンクールとは異なり、各団体の演奏の前に全体合唱が行われるなど、終始和やかな雰囲気で行われた。各団体の発表も、始めにユーモアのあるふるあいさつが行われ、しばしば会場全体が笑いに包まれたほか、ある団体が歌詞を間違えた時など、会場から拍手が起きて、逆に盛り上がる場面もあったほどである。

ステージだけを明るくするのはではなく、客席まで明るくしていたのも通常のコンサートと異なる点。そのため、会場全体に一体感があり、また、演奏した曲も「この広い野原いっぱい」など、こがで春が」など、なじみのある曲が多かったため合唱に合わせてたくさんの観客が一緒に歌っていた。

## 歌で人生を豊かに

この交歓会は、昭和五十八年に始まり、今年で二十一回目を迎える歴史のある発表会で、毎年十月の最終日曜日に開催されている。参加者の構成も主婦、小学校の先生、医者、会社員など様々で、合唱歴も数十年続いている人から、つい最近始めたヒギナーまでいろいろである。しかし、共通して言えることは、心から歌を楽しんでいるということである。参加者は、「みんなと和やかにコーラスを楽しむことが、ストレス解消になる」、「歌は生活のビタミン」、「仕事以外の仲間と楽しむことが人生を豊かにする」と口々に語る。

富岡コーラス代表の伊藤ヒデさんもそんなひとり。

「世知辛い世の中だからこそ、音楽に親しんでほしい。上手い、下手ではなく、音楽を好きになっただけでいい。音楽を愛する人に悪い人はいないのだから」そう話す伊藤さんは、本当に楽しそうである。富岡コーラスでは交歓会以外にも成人式や芸能祭のほか、親戚の結婚式などでもよく歌うという。まさに生活の中に歌があるのだ。

技術を競う合唱の緊張感もよいが、リラックスして楽しむ交歓会のような合唱も、また素晴らしい。どちらも合唱王国ふくしまの大切な宝物である。



# 合唱王国の系譜

「至幸のハーモニーができるまで」

「王国は一日にしてならず」である。福島県の合唱界が今日のように「王国」と称されるまでに至るには、先人の大いなる情熱と献身的な努力、そしていくつもの幸運な出会いがあった。

## 最初に種をまいた人

戦後の荒廃した状況の下、戦争から解放された若者達は、喪失感を埋めるためにさまざまな運動を開始した。昭和二十二年、高野廣治氏を中心に近所の若者七人で結成された合唱団「F.M.C.」（その後女性団員を加え総勢四十七人の「F.M.C.混声合唱団」にもそのひとつである。同年、高野さんらを中心に福島県合唱連盟が設立され、十一月、経専講堂（現県立図書館敷地）で第一回福島県合唱コンクールが開催され、福島県の合唱が産声を上げた。

高野氏を指揮者とするF.M.C.は、当時日本でほとんど知る者のいなかった十六世紀ルネサンスボリフォニー（多重音楽）の作曲家バレストリーナを得意とし、昭和二十五年からほぼ毎年、全国大会に出場するなど、東北を代表する合唱団に成長、本県の合唱界をリードする存在になった。

しかし、全国の壁は厚かった。昭和二十年代から三十年代は、西日本のレベルが高く、全国大会の優勝旗は箱根の山を越えないといわれており、高野氏自身も昭和二十五年の初出場を、他県と比べた実力がどうのというレベル以前の問題だった」と振り返っている。

## 転機、田中氏との出会い

昭和三十九年、高野氏とF.M.C.に衝撃が走る。日本初のプロ合唱団である東京混声合唱団指揮者田中昭氏との出会いである。田中氏が、F.M.C.の練習場に姿を見せ、指揮棒を振ると「天と地ほど音楽が変わってしまったのである。高野氏の指揮が絶対だと思っていた団

月一回研修会を開いた。高野氏も後に講師としてこの研修会に参加している。

このメンバーには、その後安積女子高現安積黎明高を七年連続を含む八度の全国大会金賞に導いた渡部康夫氏、昭和四十年代後半、福島西女高現福島西高の黄金時代を築いた五十嵐庸夫氏、会津農林高、福島高、安積高などいくつもの高校を全国に導いた現在の県合唱連盟理事長の高麗正宣氏など、そうそうたるメンバーが集っていた。

この昭和四十年代前半の動きが、合唱王国ふくしまの決定的な基礎となった。F.M.C.は、昭和四十三年も連続して全国一位になり、表彰方式が変わった昭和四十五年からも招待演奏をはじめ、四年連続して金賞を受賞。高校の部でも昭和四十五年の会津農林高校指揮・高麗氏（が）が金賞を受賞したのを始めとして次々と好成績を修めるようになっていったのである。

昭和四十九年には福島市の県文化センターで全国合唱コンクールが開かれ、F.M.C.を始め福島西女高、指揮・五十嵐氏、安積女子高、指揮・渡部氏（が）が金賞となり、いよいよ合唱界が盛り上がる。「合唱王国ふくしま」という言葉がひんぱんに使われはじめたのは、この頃の事である。

## 王国の由縁

「音楽教育の専門的な機関のない福島県で、なぜ、合唱のレベルが高いのか」という素朴な疑問がある。この疑問を識者に尋ねると、異口同音に指導者としてのコミュニケーションの緊密さ、仲の良さを挙げる。

特集 至幸のハーモニー 合唱王国ふくしまの素顔

## 至幸のハーモニーとは

「合唱王国ふくしま」とは、単に全国レベルの大会で多くの団体が活躍しているということにとどまらない。指導者層のレベルの高さ、年代、地域を問わない層の厚さ、「常に新しいものを目指す進取の精神」など、福島県の合唱界が持つ特長が生んだ「群」としての素晴らしさの総称なのである。

それは、図らずも高野氏が、純粹に音楽を訴求した気質と見事にシンクロする。技術を抱え込まずに種として蒔いていくという創生期から受け継がれてきた本県合唱界独特の気風こそが王国の真髓であり、そうした気風を基に連綿と続いている人間関係の調和こそが至幸の「ハーモニー」そのものだと考えるのである。



昭和22年 第1回福島県合唱コンクールで1位になり喜ぶF.M.C.混声合唱団の面々。トロフィーを持っているのが高野さん

員はショックを受け、相談の上、レッスンを半分出すので東京へ指揮の勉強に行ってくれ」と迫り、高野氏の東京通いが始まった。

高野氏は、専門に音楽教育を受けたことがない、いわゆる、素人ではあったが、当時、県大会で十六回の優勝、東北大会十連覇という実績があったので音楽に對し相当の自負があった。

しかし、田中氏のレッスンは高野氏の自信をいとも簡単に打ち砕いた。最初のレッスンは四十五分間、ただ立たされたのみ。まずは指揮者の姿勢、いろはの「い」から始まったのである。内心忸怩たるものがあったに違いない。

合唱の第一人者田中氏のレッスンは、高野氏の音楽観を大きく変えることになる。曰く、コンクールに出る限りは絶対に勝とう」と思っていたのが、勝とうと思つていないところに音楽は無い、真の音楽とはもっと高いところに

ある」と思つて至つたのである。昭和四十二年の合唱コンクール全国大会、高野氏が指揮するF.M.C.は、ついに全国一位を獲得した。実に十五年目の挑戦であった。勝利を求めると同時に捨てた途端、大きな勝利が転がり込んだのである。

## 合唱王国の萌芽

高野氏の非凡なところは、その後の行動である。苦勞の未獲得した田中との関係やレッスンで得たノウハウを一人ではもったいないと隠さず全てオープンにしたのである。昭和四十年代初頭、県北地区の合唱団は、高野氏を中心に指導者の勉強会を始め、急激な成長と躍進をとげた。昭和四十二年、これに刺激を受けた会津地区の高校の十名の合唱指導者が自費で田中氏を会津に招き、



昭和39年 福島駅で高野氏らに見送られる田中氏



昭和49年 全日本合唱コンクール(福島県文化センター)で表彰を受ける高野氏



安積黎明高校の星教諭



橋高校の菅野教諭



平成3年 F.M.C.混声合唱団、バレストリーナの故郷パチカン市園にてローマ法王ヨハネ・パウロ二世に特別講見、献歌。昭和54年にもパウロ六世に講見している。

### 参考図書

- 「Canto ergo sum - われ音楽す ゆえに吾れあり」(高野廣治)
- 「福島県合唱連盟20年史」福島県合唱連盟40年史「燦 50年のあゆみ」(以上 福島県合唱連盟)
- 「愛と栄光のハーモニー」輝いていま ふくしまのコーラス(以上 渡部康夫)
- 「ハーモニーよ永遠に」(福島民友社)東北は唱う(村瀬章)



監修・資料提供 福島県合唱連盟東北支部 事務局長 吉田功弥氏

ふくしまの

TAKUMI



一年を通じて美しい姿を見せる高瀬川渓谷の downstream にある浪江町大堀。この地に大堀相馬焼が生まれたのは今から約三百年前。相馬藩土半谷休閑（はんがいきゅうかん）の使用人、佐馬という人物によって創始された。大堀相馬焼には、他の産地に類をみない二つの特徴がある。一つめは、青ひび」といわれるひび割れが、器全体に拡がり地模様になっていること。二つめは疾走する馬の絵、走り駒が描かれていること。そして三つめは、「二重ふたえ」焼と呼ばれる二重構造の意匠が用いられることである。

志賀さんは窯元として創作に励むだけでなく、組合の理事長として「大堀相馬焼の里」の発展にも尽力している。伝統を守りながら新しい色やデザインの焼物が創作されている。1690年 元禄3年に窯焼きの煙が立ち上って以来、300有余年の歴史と伝統を受け継いでいる。



## 大堀相馬焼

「大堀相馬焼は、農家が農業の傍らに生活雑器を焼いたのが始まりです。」そう語るのは「志隆窯」の窯元の志賀隆次さん。「半農半陶」の精神を受け継ぐ一人だ。志賀さんの窯を訪ねた。噂に聞いていたが、大堀の陶工の仕事は速い。ろくろに向かうと、あつという間に形になった。次々と作り出される器。その速さ、鮮やかな手並みに瞠目させられる。一度見たら忘れること

のできない強い個性をもつ焼き物は、こうした高い技術によって産み出されるのだ。現在、大堀地区では二十七軒の窯元が業を受け継ぎ今に伝える。「大堀相馬焼」の特徴を生かし、なおかつさまざまなものを取り入れて、新しい「大堀相馬焼」を作りだしたい。そのため窯元が一致団結して取り組んでいく。「さらなる発展に向け、大堀相馬焼の挑戦が続く。」

やはり忘れるわけには  
いかない土地なのだ。



ヤナギレイは、身がヤナギの葉を思わせることからその名がつけられた。親潮と黒潮が会おういわき近海では良質のものが取れる。天日干したものはいわきの代表的な秋冬の産品で、酒の肴としてもご飯のおかずとしてもおいしい。

写真提供:福島民友新聞社

大好きうつくしま

## PERSON INTERVIEW

保育園から高校までをいわき市で過ごした。あれからずいぶん長い時がたち、仕事も住む場所も転々として、今、京都で小説を書いている。流転の身である。

いわきはとても遠いところになったが、それでも決して忘れることはできない。と言うよりも忘れさせてもらえない。何しろ、毎年高校時代の恩師から美味しい海の幸が届くのだ。言うまでもなく、京都から海は遠い。新鮮な海産物は何よりのご馳走で、ヤナギだのワカメだのウニの貝焼きだの届いた日には、夫の目はメヒカリのごとく輝きを増し、食卓は和む。ご近所に分けては鼻高々でいわきの自慢をする。そういえば、いわきは海だけでなく山の幸も豊富だった。よく父に連れられて山に入り、山菜やきのこ狩りをした。そんな話をするとやはり皆に羨ましがられる。

流転の身にあると、ほうぼうで福島県出身者に出会う。京都でももちろん出会う。京都は和菓子の町で、菓子自慢を始めたから、まずこの都道府県も太刀打ちできない。そんな京都にあつてさえ、福島県勢が胸を張って自慢するのは、三万石のエキソソパイだ。しっとりとしたパイ皮にくるまれた、あつさり味の上品な餡。それでいて気取ったところのない大きさ。これ

だけお菓子だらけの町でも似たものはない。ときどき思い出すと無性に食べたくなる。そんなときは、県内に住む友人に自著を一冊送る。すると黙っていてもエキソソパイが送り返されてくる。そういう手はずにはない。やはり忘れるわけにはいかない土地なのだ。



デビュー作『僕がかくや姫』の舞台となった「土井晩翠作詞の校歌を持つ伝統ある女子高」と立錫する女子高「こと立錫する女子高」（現在は磐城桜が丘高等学校）。



撮影:松尾成美

### 松村栄子さんプロフィール

昭和36年静岡県生まれ。5歳の時、父親の仕事の都合によりいわき市に移住し、高校時代まで過ごす。大学卒業後会社勤めを経て文筆業に専念。平成2年に『僕がかくや姫』で「海

蒸」新人文賞を受賞。平成4年には「至高聖所（アハトーン）」で第106回芥川賞を受賞した。著書として他に「セラヴィ」「紫の砂漠」など。最新刊は「雨にもまけず粗茶一服」。

文中のヤナギとはヤナギレイのこと。

【問い合わせ先】 大堀相馬焼協同組合 TEL0240-35-4917

# 日本スポーツマスターズ2004 福島大会開催



スポーツ愛好者の中で競技志向の高いマスターズ世代(中・高齢者層)を対象とした日本スポーツマスターズ(以下四福島大会)が九月二十一日から二十六日まで県内十二市町村を会場に開催されました。四回目を迎えた今大会は、東北・北海道では初めての開催です。

大会には、全国から三十五歳以上の選手約六千人が参加。多くの県民が応援する中、バレーボールやバスケットボール、空手、ゴルフなど十二競技で、日頃鍛えた技と力を存分に発揮しました。全競技に参加した本県勢は、団体・個人の計十八種目で優勝を飾るなど大活躍しました。

この大会にはたくさんの方のスポーツランテアの皆さんが競技運営や会場整理、参加者・見学者へのおもてなしなどに参加。大会を支える大きな力となりました。また、サッカーのラモス瑠偉さんやマラソンの谷川真理さんなどのシンボルメンバーは、開会式やスポーツ教室などで参加者や県内の子供たちと交流を図り、スポーツの素晴らしさを伝えました。



日本スポーツマスターズ2004福島大会 フォトコンテストより

高田宮妃久子さまが(来県大会期間中には、高田宮妃久子さまが来県され、開会式に出席されるとともに、ゴルフやソフトボールなどの競技を視察、選手に声援をおくられました。また、郡山養護学校なども訪問され、作品製作やリハビリを兼ねたスポーツに励む生徒に優しく声をかけられました。



## 「秋、ふるさとの川に鮭が帰ってきました」 木戸川鮭漁

1 檜葉町 「浜通り」

お正月の新巻や塩引きなどで、またその卵はすじこやいくらとして食卓を彩る鮭。毎年秋になると、産卵のため生まれた川を遡上します。

この鮭を捕獲する漁を見ようと、檜葉町の木戸川には県内外各地から多くの人が訪れます。漁では、まず上流と下流に網を張り、漁師たちは腰まで水につかり、上流から少しずつ網を引いて下流の網と合わせます。こうして鮭を追い込んだ後、川岸に引き上げます。「合わせアミ漁」と呼ばれる木戸川独特の伝統漁法です。詰めかけた見物人からは、網の中で勢よく水を上げる体長一メートル近い鮭に歓声が上がっていました。漁は鮭の増殖保護を目的に実施されており、捕獲された鮭から採卵して人工ふ化された稚魚は、翌年の春放流されます。



## 「古里の名誉をかけて ふくしま駅伝」

2 白河市・福島市 「中通り」

第十六回市町村対抗福島県縦断駅伝競走大会(ふくしま駅伝)が十二月二十一日、澄み切った秋晴れの下、八十二市町村二千二百九十六人が参加して行われました。

白河市から福島市までの十六区間、95.2キロのコースで行われるこの大会は地域の人が一丸となつて取り組む県民行事。午前八時の号砲を合図に白河総合運動公園陸上競技場を一齐にスタートした選手達は、地元や沿道の人達の熱い声援を受けて、心ひとつにタスキをつなぎゴールの福島県庁を目指しました。

レースは安定した力でタスキをつないだ郡山市が5時間4分17秒でゴール、二度目となる総合と市の部での優勝を飾りました。町の部は船引町が、村の部は連覇を狙った飯館村が制しました。



## 「全国の逸品がふくしま・会津に集結 第二十一回伝統的工芸品全国大会」

3 会津若松市 「会津地方」

十月二日から七日まで会津若松市の会津総合運動公園などで第二十一回伝統的工芸品全国大会並びに記念催事が開催され、大勢の来場者で賑わいました。記念催事の「伝統工芸ふれあい広場・ふくしま」では、織り、染め、漆、和紙、文具など、全国の伝統的工芸品を展示。また、「うつくしま地場産品フェア」では、大堀相馬焼、会津本郷焼、奥会津編み組細工などの福島県の伝統的工芸品の展示のほか、特産品の即売などが行われました。

伝統的工芸品は職人の手により創造された伝統の技です。その伝統の技は、作り出した職人の手から使う人の手へ私たちの暮らしを彩る素敵な道具となります。来場者は、一品品大切に作られた本物の価値ある逸品にふれ、晩秋の一日を心ゆくまで楽しんでいました。

なお、期間中天気にも恵まれ、入場者は、歴代第二位の十二万三千人にも達しました。





さわやかな水色のバス。車体には「ふくしまの米」と大きく書かれています。このバスは、東京都区内と横浜市で運行されている路線バスで、福島県のお米をPRしながら走っています。車体に描かれているのは、「ふうくん」と「しまちゃん」の「シムル」。福島県産「コシヒカリ」と「ひとめぼれ」をアピールするイメージキャラクターとして親しまれています。「コシヒカリ」は県内で収穫されるお米の六割を占める主力品種、「ひとめぼれ」はそれに次ぐ第二位の品種です。おいしい「ふくしまの米」皆さんもたくさんお召し上がりください。

【問い合わせ先】県庁流通消費グループ TEL024-521-7371 ホームページ <http://www.pref.fukushima.jp/an-ryu/>

## グラフうつくしまの年間個人購読を受け付けています

グラフうつくしまは、季節毎に年4回(4月、7月、10月、1月)発行しています。官公庁や図書館などでご覧いただけますが、確実な入手には個人購読をお勧めいたします。4回分の送料(520円)をご負担いただければ、次号から直接お手元にお届けします。

申し込み方法 郵便番号・住所・お名前・電話番号をご記入の上、520円分の切手または郵便小為替を添えて福島県県政広報グループまでお送りください。

